

若い娘や女中、芸者、中年近い人まで勤労働員で軍需工場への時代だった。女中のいなくなった私の家は、近所の五、六十才のおばさんを手伝いに頼み、赤子に乳をやる暇もない程働かざるを得なかった。当時は何も彼も配給制度で、食糧の大事な米で作る酒の業務用の割当もほんの少量であった。何時頃からそうになったのか、結婚してさん三年余り東京にいた私にはわからないが、何の会合も特高の許可が必要であった。会議の時も、終わつてのささやかな宴席でも、根岸刑事の傍若無人ぶりに、役員はもとより出席者全員が機嫌を損ねない様にと気をつかっている様子がありありと見えた。

十九年二月頃だったと思う。会議は、一町六ヶ村、高田町、赤沢、永井野、尾岐、藤川、東尾岐、旭、各村の町村会議員代表三十数名の集りだった。型通りの会議が終り皆宴席に座られた。手伝いの人達は難しい場所には出たがらず、畢竟私が出る他なく、酒を運んで行つて挨拶をし、各所に配り帰ろうとして立ち上がったら、いきなり後ろから羽交締めにされた。びつくりして振向いたら悪鬼の様な根岸刑事の顔があった。振りほどこうとしても大男にはどうにもならず、「助けて」と何度叫んでも後難を恐れてか誰一人席を立たず、屈辱と口惜しさ、情けなさに血の氣も引き必死で抵抗している時、立ち上がつて、「まあまあ」と、なだめに間に入つてくれたのは、30数人中一番年長の根本光正さんだった。光正さんは私が結婚前当時国民学校に奉職していた藤川村の方である。根岸刑事が光正さんの方に向いたその姿をちらつと見たが夢中で長い廊下を走つて母屋の茶の間に逃げた。後を追つて来た彼は、寝かされていた赤子を庇おうとした義母を突き飛ばして倒れた上を飛び越えた時、迎えに来た議員三名に連れ戻され何とか助かったが、その時庇つてくれた光正さんは柔道で投げられたらし

い。本当に有難く申訳なく、今は亡き光正さんに感謝し続けている。「一体私が何をしたというのだろう」「義父の前に手をついて「申し訳ありません」と謝つたけれど、胸中は屈辱と口惜しさでいっぱいだった。

その夜赤子に乳を含ませながら、何故こんな思いをしなければならぬのだろう。わからないと又も屈辱と口惜しさがこみ上げて声を忍んで泣いた。涙が無心に乳を飲む子の頬にぼたぼた落ちて流れた。その後間もなく或る議員から、こつそり聞かされた事は、根岸刑事が会議前から相当酒に酔つていたという事だった。それにしても三十数名もいるしかも町村の代表者に私が助けてと頼んだのに、誰一人席も立たず、権力の前には何も出来なかったという事は後々まで大きな不信となつて心に残つた。その後私宅の会議では同じような事はなかったが、町の中で横暴の噂をたびたび耳にしたし、酒に酔つては通りを歩く人達に故もなく乱暴した事も聞いた。当時高田町は通りの両側は勢いよく流れる川だった。町農協（今は塩田呉服店横の町駐車場）の職員の某さんは、自転車で橋を渡り職場に帰ろうとした時、自転車もろ共川に投げ込まれたとの事、幸にも両側も底も土だから怪我也も少なくてすんだらしい。あんなに大人しい人までと、皆同情した。

その年の八月十六日。疎開学童が来ても、慰問の日曜学校生徒にあの有様。六区出身の在京の若い人が実家に用があり帰郷した時、近所の知人から紅葉館に疎開している息子の様子を見てきて知らせしてほしいと頼まれたので、玄関に立つていて、丁度入ってきた刑事に「何うろついてる」と髪を鷲掴みにされ、囲炉裏端に引摺えられ尋問された。あの時の様子は六十余年たった今でも忘れられない。「きさま何しにうろついていた」「疎開している生徒の親に頼まれたので逢つて